

食と旅 火

ふるさと 水

アート 金

得する 土

ぐるっと東日本

母校をたずねる

仲間を信じて、自分信じて

北京五輪女子ボート出場 浜田美咲さん —2000年度卒

埼玉県立浦和第一女子高 7

2008年北京オリンピック出場など、女性ボート界の代表的選手だった浜田美咲さん(39)は、00年度卒で、埼玉県立浦和第一女子高校の部活でボートに出会いました。挫折や引退、結婚・出産後の復活と、何度もチャレンジを続けた競技人生を振り返ってくれました。

【坂本高志】

小学校の文集に「オリンピックに出たい」という夢を書きました。中学3年まで競泳をやり、強豪高校からも誘われましたが、体力的、精神的にいっぱいになり、水泳から卒業しようとして、短期決戦の受験勉強で一女ボート部は全国を狙えるレベルと聞き、スポーツへの情熱が戻りました。水泳で培った筋力が生かせることも考えました。当時の顧問の先生はボート未経験者で、指導は週末外部コーチが来てくれました。平日は練習メニューを生徒たちだけで行うのですが、部全体に「やる時はやる」という厳しさを、「思

い切り楽しむ」というメリハリのある雰囲気があり、それが魅力でした。「クルーを信じて、自分を信じて」という一女ボート部の「信念」があったからこそ、心から分り合える仲間と出会えました。種目は(漕手4人と舵手で構成する)舵手付きフォア。仲間と気持ちが一体になった時に得られるパワーにひかれました。2年時に個人で国体の県選抜に選ばれたほか、一女として3年時のインターハイで準優勝まで行きました。高校最後の大会となる国体でも一度県選抜に選ばれ、同級生の滝島光さん(元一女ボート部顧問、現南

はまだ・みさき 1983年、埼玉県桶川市生まれ。早稲田大学人間科学部2年時にボートのU23日本代表に選抜された。2008年北京オリンピック軽量級ダブルスカル9位。11年に選手を引退した後、結婚、出産を経て16年復帰。18年全日本選手権舵手なしペアで準優勝し、再び引退。現在、戸田中央メディカルケアグループ(本部・埼玉県戸田市)の特別養護老人ホーム職員。旧姓は熊倉。



埼玉県戸田市で、坂本高志撮影

「自分でものを考える人に…」

4万人以上の卒業生を生んでいる浦和一女高だが、最も代表的な卒業生を挙げるなら「同窓生に質問すると、多くが『石井桃子さん』と答える。現在のさいたま市浦和区に生まれ、前身である浦和高等学校(高女)を1922(大正11)年度に卒業。日本の児童文学の第一人者として活躍を続け、2008年に101歳で亡くなった。

石井は、00年に発行された一女の「百年誌」でインタビューに応じている。それによると、石井は「静かでおだやかな浦和」がとても好きで、高女時代については「明るく自由な校風のなか、将来への不安も不満もなく、子どもっぽい生徒であつたらう」と振り返っている。日本女子大から文芸春秋社の編集者になり、英語力を生かして「クマのプーさん」などの翻訳を手がけた。戦後、児童文学の創作にも励み「ポンちゃん雲に乗る」はベストセラーに。創作、

次回は28日掲載



1959(昭和34)年当時の石井。東京・荻窪の自宅一部を開放し、子ども向けの図書室「かつら文庫」の活動を始めた時期にあたる

ングルスカルを始め、13年の全日本大学選手権で優勝。周りから「五輪を目指せ」と言われ、自分も強く意識しました。体格の劣る日本人が世界で勝つには軽量級といわれますが、体重制限が厳しいです。減量に失敗し、04年のアテネ五輪では選考会すら参加できませんでした。06年にローイングクラブ(RC)がある戸田中央総合病院に就職したのは、2年後の北京五輪に挑むためでした。内科外来の仕事しながら朝晩は練習。ハードな生活でしたが、(ペア種目の)軽量級ダブルスカルに出場した北京五輪で、日本人選手過去最高の9位に。自分以上に親や

卒業生「私の思い出」募集 埼玉県立浦和第一女子高校卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で、学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。卒業年度、氏名、年齢、職業、住所、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100-8051、毎日新聞地方部首都圏版「母校」係(住所不要)へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は、紙面や毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。 高校、大学時代の友達が喜んでくれたのがうれしかったです。 11年に引退し、その後結婚、出産しましたが、5年後に復帰しました。海外はママアスリートが多いけれど、日本のボート界では前例がなく、「私が第一号になりたい」と。仕事と育児、練習と本気で取り組まされた。18年の全日本選手権のペア種目で2位になり、「今